○記入用紙

JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	松森晶子	学位※	文学修士
所属※	文学部 英文学科	職名※	教授
連絡先	matumori@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/ read0029347		
研究分野※	言語学		
研究キーワード※	音韻論、音声学、日本語、琉球語、歴史言語学、方言調査		
共同研究・競争的資金等の研究課題	共同研究: ・人間文化研究機構 国立国語研究所 共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（研究代表者 窪薗晴夫） ・人間文化研究機構 国立国語研究所 共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（研究代表者 木部暢子） 競争的資金: ・「系列別語彙」の拡充とそれを使用した琉球語の歴史言語学的考察（研究代表者）（JSPS科研費 基盤研究（C）18K00588） ・消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築（研究分担者）（JSPS科研費 基盤研究（A） 19H00530） ・南琉球宮古諸方言のアクセント研究（研究分担者）（JSPS科研費 基盤研究（B） 20H01259）		
社会貢献・産学官連携活動等	・日本学術会議 第1部 連携会員（2011年～ 現在） ・日本音声学会 編集委員（2001年４月～2004年３月）、理事（2010年４月～2016年３月）、庶務委員長（2010年４月～2013年３月）、音声学普及委員（2013年４月～2019年３月） ・日本語学会 編集委員（2003年６月～2006年５月）、常任査読委員（2010年６月～2013年５月）、『日本語学大辞典』編集委員（2008年２月～2012年６月） ・日本言語学会 編集委員（2015年６月～2018年５月）		
研究領域		（SDGs）	
研究テーマ※	琉球語と日本語の音韻史、および日本語の祖語の再建		
概要※ （概ね1000字以内） （写真・グラフ等自由）	【研究の背景・目的・内容】 日本語は単一の言語体系なのではなく、その内部に様々な体系（方言の違い）を内包している。とりわけ日本に文献が残される古代以前に本土の日本語と分かれて独自の変容を遂げた琉球語は、その長い歴史を通じて、日本語とはまったく別の言語体系と言えるほど大きく異なる特徴を備えるに至った。そのため琉球語は、言語の歴史研究にとっての格好のテーマを提供している。 言語の歴史研究（歴史言語学）は、同系統の言語同士を比較することによって、それらが分かれ出た時代の言語（祖語）がどのような体系や特徴を持っていたかを推理する（これを「再建」と言う）ことを可能にしている。また、一言語の音韻特徴を緻密に分析することによっても、ある程度、その言語の過去の姿を知る手がかりをつかむことができる。このような言語分析の手法を用い、琉球語と日本語、あるいは日本語内部の諸方言を比較しながら、その祖先の体系（祖語）を再建する、という研究を行っている。 【応用例、研究の展望】 日本語と琉球語の分析を通して、両言語が分岐する前の日本語の姿に迫る―すなわち有史以前の日本語の特徴を浮き彫りにする―ことができる。あわせて日本各地に観察されているアクセントや声調の様々な体系が、どのようなプロセスを経て現在あるような姿に至ったのかについても明らかにできる。またその考察によって、言語はなぜ、どのような方向へ変化するのか、という考察を行うことも可能になる。 【研究方法の特色】 これまで成されてきた日本語・琉球語の多くの記述研究を最大限に活用するだけでなく、自らフィールドワークによる調査を行い、特に従来の記述研究によって光の当てられなかった言語の側面を、記述データに記録・保存することを主眼としている。琉球語の分布地域は、奄美大島から与那国島に至る鹿児島県の一部と沖縄県のほぼ全域にかけてであるが、現在はその地域における調査を、年に数回実施している。		

本研究関連 特許・論文等	・2000 年 4 月 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発―沖永良部島の調査から―」『音声研究』第 4 巻第 1 号: 61-71. 日本音声学会 ・2000 年 6 月 「琉球の多型アクセント体系についての一考察―琉球祖語における類別語彙3拍語の合流の仕方―」『国語学』第 51 巻 1 号: 93-108. 国語学会 ・2001 年 8 月 「完了した音変化の進行過程推定の一方法―琉球における狭母音化と軟口蓋無声破裂音の摩擦音化―」『音声研究』第 5 巻第 2 号: 61-74. 日本音声学会 ・2012 年 4 月 「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』第 16 巻第1号: 30-40. 日本音声学会 ・2016 年 9 月「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み―その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件―」『言語研究』第 150 号: 59-85. 日本言語学会 ・2016 年 12 月「三型アクセント記述研究の現在と未来―隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら―」『音声研究』第 20 巻第 3 号: 24-45. 日本音声学会 ・2017 年 1 月「北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化―その原因について考える―」『日本語の研究』第 13 巻1号: 1-17. 日本語学会 ・2017 年 10 月「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか―通時的視点から探る―」『日本語の研究』第 13 巻 4 号: 51－67. 日本語学会 ・2019 年 2 月 A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review*. Vol. 29, No.1 (Special Issue: Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean): 51-83. De Gruyter Mouton ・2019 年 4 月「奄美大島南部・瀬戸内町における重音節発生の歴史的経緯―狭母音化との相対年代から考える―」『日本語の研究』第 15 巻 1 号:1-17.日本語学会
共同研究・外部機関との連携への期待	・ ・